いっき　わかい　えびのんこっ

えびのの方言で日本の昔話

桃太郎・浦島太郎・金太郎

えびの市歴史民俗資料館

目次(もくじ)

1．桃太郎(ももたろう)

・えびのの方言(ほうげん)　1．3．5．7．9．11

・標準語(ひょうじゅんご)　2．4．6．8．10．12

2．浦島太郎(うらしまたろう)

・えびのの方言(ほうげん)　13．15．17．19．21．23
25．27．29．31．33

・標準語(ひょうじゅんご)　14．16．18．20．22．24
26．28．30．32．34

3．金太郎(きんたろう)

・えびのの方言(ほうげん)　35．37．39

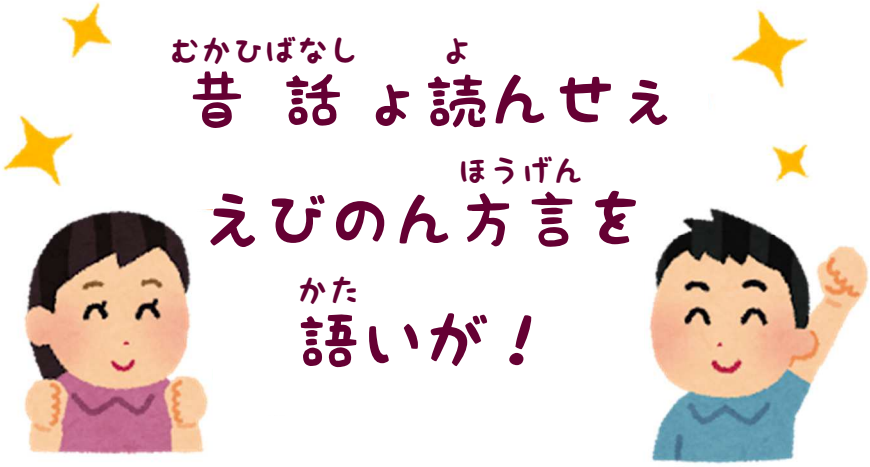
・標準語(ひょうじゅんご)　36．38．40

※「えびのの方言(ほうげん)」の漢字(かんじ)のふりがなは、方言(ほうげん)のことばになっているところがあります。

この冊子は右のページが標準語、左のページが方言になっています。

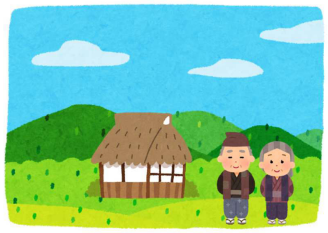
方言は、わかりにくい言葉がたくさんあります。また、文字では伝えられないイントネーションも今ではあまり聞くことがなくなってきています。

昔話を読みながら、生まれ育ったえびのの方言を楽しく理解していただけたらと思います。



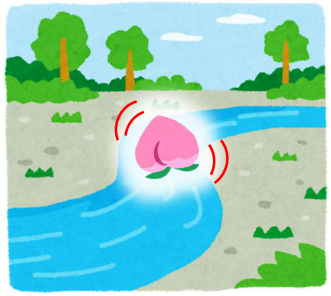
昔話を読んで、えびのの方言を話そう！

桃太郎（えびのの方言）



昔昔、ある所に、爺さんと婆さんが住んじょいやったげな。

爺さんな山ぃ、しば刈け、婆さんな、川へ洗濯しけ、行っきゃった。



婆さんが川で洗濯しおったなら、ドンブラコ、ドンブラコと、ふとか桃が流れっきもした。

「んだもしたん、こや、よか土産ぃないなぁ」

婆さんな、ふとか桃を、拾上げっ、わが家、持っ帰いやった。

桃太郎（標準語）

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。

おばあさんが川でせんたくをしていると、ドンブラコ、ドンブラコと、大きな桃が流れてきました。

「おや、これは良いおみやげになるわ」

おばあさんは大きな桃をひろいあげて、家に持ち帰りました。

桃太郎（えびのの方言）

そいから、爺さんと婆さんが桃を食もろち、桃を切っみやったなら、もしたん、中から元気ん良か男ん赤ちゃんが飛っ出っきもした。

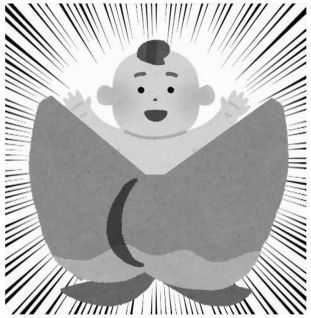
「こや、まこて神さぁがくいやったとに間違なか」

子どんがおらんかった爺さんと婆さんは、あっぜ、喜っびゃした。

桃から生んまれた男ん子に、爺さんと婆さんは、桃太郎ち言う名前をつけやった。

桃太郎はずんずんふとなっせぇ、そんうち、強か男ん子にないもした。そいから、ある日んこっ、桃太郎が言たげな。

桃太郎（標準語）



そして、おじいさんとおばあさんが桃を食べようと桃を切ってみると、なんと中から元気のよい男の赤ちゃんが飛び出してきました。

「これはきっと、神さまがくださったにちがいない」

子どものいなかったおじいさんとおばあさんは、大喜びです。

桃から生まれた男の子を、おじいさんとおばあさんは桃太郎と名付けました。

桃太郎はスクスク育って、やがて強い男の子になりました。

そしてある日、桃太郎が言いました。

桃太郎（えびのの方言）

「俺、鬼ヶ島ぃ行たっせぇ、悪か鬼を退治しっくって

なぁ」

そいから、婆さんにきび団子を作っもろっ、鬼ヶ島へ

出っ行っもした。

旅の、途中で、犬に出会たげな。

「桃太郎さぁ、どけ、行っきゃっとな？」

「鬼ケ島ん、鬼退治に、行っとこいやっど」

「そいなら、腰に下げちょい、きび団子を一っくいやれ

ば、一緒き行っもひど」

犬は、きび団子をもろっ、桃太郎と、一緒き行っこて

ないもした。

桃太郎（標準語）

「ぼく、鬼ヶ島へ行って、わるい鬼を退治します」

そして、おばあさんにきび団子を作ってもらうと、鬼ヶ

島へ出かけました。

旅の途中で、イヌに出会いました。

「桃太郎さん、どこへ行くのですか？」

「鬼ヶ島へ、鬼退治に行くんだ」

「それでは、お腰に付けたきび団子を一つください

な。おともしますよ」

イヌはきび団子をもらい、桃太郎のおともになりまし

た。

桃太郎（えびのの方言）

そしたなら、今度は、猿に出会たげな。

「桃太郎さぁ、どけ、行っきゃっとな？」

「鬼ケ島ん、鬼退治に、行っとこいやっど」

「そいなら、腰に下げちょい、きび団子を、一っくいやれば、一緒き行っもひど」

そしたなら、今度は雉（きじ）に出会たげな。

「桃太郎さぁ、どけ、いっきゃっとな？」

「鬼ケ島ん、鬼退治に、行っとこいやっど」

「そいなら、腰に下げちょい、きび団子を一っくいやれば、一緒き行っもひど」

桃太郎（標準語）

そして、こんどはサルに出会いました。

「桃太郎さん、どこへ行くのですか？」

「鬼ヶ島へ、鬼退治に行くんだ」

「それでは、お腰に付けたきび団子を一つくださいな。おともしますよ」

そして、こんどはキジに出会いました。

「桃太郎さん、どこへ行くのですか？」

「鬼ヶ島へ、鬼退治に行くんだ」

「それでは、お腰に付けたきび団子を一つくださいな。おともしますよ」

桃太郎（えびのの方言）

こげんしっせぇ、犬、猿、雉（きじ）の同志ょ手に入れた桃太郎は、ごろいと鬼ヶ島へやっきもした。

鬼ヶ島では、鬼たっが、近っの村からおっ盗った、宝物や御馳走を並べっ、焼酎飲んが、はずんじょっとこいじゃした。

「我が達ゃ、油断すっといかんど。それ、行っどー！」

犬は鬼の尻に噛んちっせぇ、猿は鬼の背中をかかじっ、雉（きじ）は嘴で鬼の目を突くじった。

そしたや、桃太郎も、刀を振い回せっ、あれ、暴れたげな。

桃太郎（標準語）

こうして、イヌ、サル、キジの仲間を手に入れた桃太郎は、ついに鬼ヶ島へやってきました。

鬼ヶ島では、鬼たちが近くの村からぬすんだ宝物やごちそうをならべて、酒盛りの真っ最中です。

「みんな、ぬかるなよ。それ、かかれ！」

イヌは鬼のおしりにかみつき、サルは鬼のせなかをひっかき、キジはくちばしで鬼の目をつつきました。

そして桃太郎も、刀をふり回して大あばれです。

桃太郎（えびのの方言）

ごろいと、鬼の親分が、「まいったぁ、まいったぁ、かんねせっくいやん、助けっくいやん」と、手をつっせぇ謝ったげな。

桃太郎と犬と猿と雉（きじ）は、鬼から取い上げた、宝物の荷車ぃ積んせぇ、元気よく家に帰いもした。

爺さんと婆さんは、桃太郎の無事な様子見っせぇ、あれ喜っびゃした。

そいから、三人は宝物のおかげで、幸せに暮らっしゃったげな、ちゅうこっがんさ。

おわい

桃太郎（標準語）

とうとう鬼の親分が、「まいったぁ、まいったぁ。こうさんだ、助けてくれぇ」と、手をついてあやまりました。

桃太郎とイヌとサルとキジは、鬼から取り上げた宝物を荷車につんで、元気よく家に帰りました。

おじいさんとおばあさんは、桃太郎の無事な姿を見て大喜びです。

そして三人は、宝物のおかげでしあわせにくらしましたとさ。

おしまい

浦島太郎（えびのの方言）

昔昔、ある村に、心ん優しか浦島太郎ち言う若者がおいもした。

浦島さぁが海辺を通いかかったなら、子どんたっが、ふとかカメをつかめちょいもした。

近きよっ見ったら、子どんたっがみんなでカメをいじめちょったげな。

「まこて、ぐらしか、離せっやらんな」

「んにゃ。俺たっが、よいなこっ、捕めたっじゃっでや」

見ればカメは涙をハラハラこぼせっせぇ、浦島さぁを見っちょいもした。

浦島さぁは、お金を取い出せっ、子どんたっに差し出せっせぇ言もした。

浦島太郎（ 標準語 ）

むかしむかし、ある村に、心のやさしい浦島太郎という若者がいました。

浦島さんが海辺を通りかかると、子どもたちが大きなカメをつかまえていました。

そばによって見てみると、子どもたちがみんなでカメをいじめています。

「おやおや、かわいそうに、はなしておやりよ」

「いやだよ。おらたちが、やっとつかまえたんだもの」

見るとカメは涙をハラハラとこぼしながら、浦島さんを見つめています。

浦島さんはお金を取り出すと、子どもたちに差し出して言いました。

浦島太郎（えびのの方言）

「そいなら、こん銭のくるって、おじさんにカメを売っくれんな」

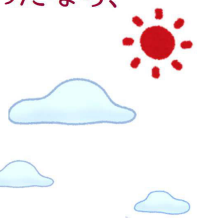
「うん、そいならよかよ」

浦島さぁは、子どんたっからカメを受け取っせぇ、

「も、ひっ捕まいやんな」

と、カメをそろいと、海の中へ逃がっしゃった。

さて、そいから二、三日たったある日、浦島さぁが海に出かけっせぇ、魚釣いをしちょったなら、

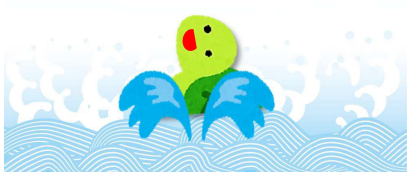


「浦島さぁ、・・・浦島さぁ」

と、誰かが呼ん声がしたげな。

「ないな？ 誰が呼んじょっとじゃろかい？」

「私じゃひが」



そしたなら海の上に、

ひょっこいとカメが頭を出せっ、言たげな。

浦島太郎（標準語）

「それでは、このお金をあげるから、おじさんにカメを売っておくれ」

「うん、それならいいよ」

浦島さんは、子どもたちからカメを受け取ると、

「もう、つかまるんじゃないよ」

と、カメをそっと、海の中へ逃がしてやりました。

さて、それから二、三日たったある日、浦島さんが海に出かけて魚をつっていると、

「浦島さん、・・・浦島さん」

と、だれかが呼ぶ声がします。

「おや？ だれが呼んでいるのだろう？」

「わたしですよ」

すると海の上に、

ひょっこりとカメが頭を出して言いました。

浦島太郎（えびのの方言）

「こん前は、まこてあいがとさげもひた」

「ああ、あんとっのカメさんじゃいけな」

「はぁ、おかげさぁで命が助かいもした。とこいで浦島さぁは、竜宮に行ったこちゃあいもひか？」

「竜宮ちな？ そやないな？ 竜宮ち、どけあっとな？」

「海の底じゃひと」

「なんち？ 海の底どんに、行っがなっとな？」

「はぁ。私が連れっ行っもひで。早よ、背中ぃ乗っくいやんせ」

カメは浦島さぁを背中ぃ乗せっせぇ、海の中をどんどんもぐっ行っもした。

浦島太郎（標準語）

「このあいだは、ありがとうございました」

「ああ、あのときのカメさんかい」

「はい、おかげで命が助かりました。ところで浦島さんは、竜宮へ行ったことがありますか？」

「竜宮？ さあ？ 竜宮って、どこにあるんだい？」

「海の底です」

「えっ？ 海の底へなんか、行けるのかい？」

「はい。わたしがお連れしましょう。さあ、背中へ乗ってください」

カメは浦島さんを背中に乗せて、海の中をずんずんともぐっていきました。

浦島太郎（えびのの方言）

青かも青か光の中で、コンブがユラユラ。

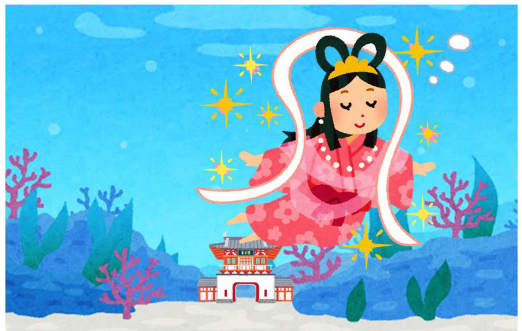
赤やピンクのサンゴん林が、どこずぃでん続いちょいもした。

「まこて、みごっかなぁ」

浦島さぁがウットイしちょったや、いっの間にか立派なご殿に着っもひた。

「着っもひたど。こん、ご殿が竜宮じゃひど。早よ、こっちせぇ」

カメに案内さるいまま進ん行ったや、こん竜宮の主人の、美しか乙姫さぁが、色とぃどぃの魚たっと、てのっせぇ浦島さぁを出迎えっくいやひた。



浦島太郎（標準語）

まっ青な光の中で、コンブがユラユラ。

赤やピンクのサンゴの林が、どこまでも続いています。

「わあ、きれいだな」

浦島さんがウットリしていると、やがて立派なご殿へつきました。

「着きましたよ。このご殿が竜宮です。さあ、こちらへ」

カメに案内されるまま進んでいくと、この竜宮の主人の美しい乙姫さまが、色とりどりの魚たちと一緒に浦島さんを出迎えてくれました。

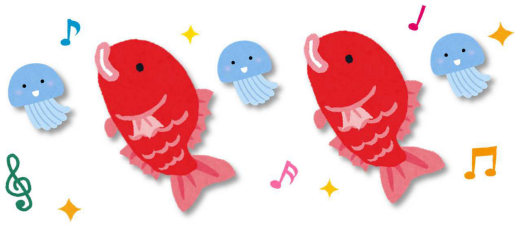
浦島太郎（えびのの方言）

「ゆくさおじゃったもした、浦島さぁ。私は、こん竜宮の主人の乙姫じゃぃもひが。こん前はカメを助けっくいやっせぇ、おおきになぁ。お礼に、竜宮をご案内しもんそ。ま、ゆっくいしったもんせ」

浦島さぁは、竜宮の広間へ案内されもした。

浦島さぁが用意された席に座ったなら、魚たっが次から次、見たこっもなかよな御馳走を運んきもした。

ふんわりと気持っの良か音楽が流れっ、タイやヒラメやクラゲたっの、見事て踊いが続っこっじゃひた。



浦島太郎（標準語）

「ようこそ、浦島さん。わたしは、この竜宮の主人の乙姫です。このあいだはカメを助けてくださって、ありがとうございます。お礼に、竜宮をご案内します。どうぞ、ゆっくりしていってくださいね」

浦島さんは、竜宮の広間へ案内されました。

浦島さんが用意された席に座ると、魚たちが次から次へと、見たことがないようなごちそうを運んできます。

ふんわりと気持ちのよい音楽が流れて、タイやヒラメやクラゲたちの、みごとな踊りが続きます。

浦島太郎（えびのの方言）

ここはまこて、天国のようじゃ。

そして、「もう一日、もう一日」

ち、乙姫さぁが

言やいまんま竜宮ですごしちょいうち、

三年の月日がたっちょったげな。

浦島さぁは、ハッち思出ひもした。

(家族やら友だちゃ、どげんしちょっどかい?)

そこで浦島さぁは、乙姫さぁに言もした。

「乙姫さぁ、今ぎい有い難がひた。じゃっどん、も、

ぼっぼっ、我が家帰らせったもんせ」

「帰いやっとじゃひか? 良かいやれば、こんままこ

こで暮せっみいやれんな」

「いいや、俺が帰っくっとを待っ

ちょい人達が、おいもひで」

浦島太郎（標準語）

ここはまるで、天国のようです。

そして、

「もう一日、もう一日」

と、乙姫さまにいわれるまま竜宮ですごすうちに、

三年の月日がたってしまいました。

浦島さんは、はっと思い出しました。

(家族や友だちは、どうしているだろう?)

そこで浦島さんは、乙姫さまに言いました。

「乙姫さま、いままでありがとうございます。

ですが、もうそろそろ、家へ帰らせていただきます」

「帰られるのですか? よければ、このままここで暮

しては」

「いいえ、わたしの帰りを待つ者も

おりますので」

浦島太郎（えびのの方言）

そしたや、乙姫さぁは、

淋しそうに言たげな。

「・・・じゃひとな。そや、とぜんねないもひなぁ。じゃれば、土産ぇ玉手箱を差し上げもんそ」

「玉手箱？」

「はぁ。こん中には、浦島さぁが竜宮で暮らっしゃった『時』が入っちょいもひで。こよ開けんじん、ずっと持っちょいやれば、浦島さぁは年ゃ取いやれん。いっずいとんの、今ん若か姿んまんまでおいがないやひど。

じゃっどん、開けっしもたなら、『時』が戻いもひで、いけなこっがあってん開けんごっしっくいやんせ」

浦島太郎（標準語）

すると乙姫さまは、

さびしそうに言いました。

「・・・そうですか。それはおなごりおしいです。では、おみやげに玉手箱を差し上げましょう」

「玉手箱？」

「はい。この中には、浦島さんが竜宮で過ごされた『時』が入っております。これを開けずに持っている限り、浦島さんは年を取りません。ずーっと、今の若い姿のままでいられます。ですが開けてしまうと、『時』がもどってしまいますので、決して開けてはなりませんよ」

浦島太郎（えびのの方言）

「じゃひとな、わかいも

ひた、有い難がひた」

乙姫さぁと別れた浦島

さぁは、またカメぃ送られっ地上へ帰いもした。

地上にもどった浦島さぁは、まわいを見回せっ、た

まがいもした。

「んだもしたん？ たった三年で、あっぜ様子がひっ

変わったもんじゃなぁ」

本の事ここは、浦島さぁが

釣いをしちょった所じゃった

とに、ないか様子がちごちょ

いもした。

浦島太郎（標準語）

「はい、わかりました。

ありがとうございます」

乙姫さまと別れた浦島さ

んは、またカメに送られて地上へ帰りました。

地上にもどった浦島さんは、まわりを見回してびっ

くり。

「おや？ わずか三年で、ずいぶんと様子がかわっ

たな」

たしかにここは、浦島さん

がつりをしていた場所なので

すが、なんだか様子がちがい

ます。

浦島太郎（えぴのの方言）

浦島さぁ家は、どけも見あたらんし、出おた人も知らん人ばかっかいじゃひた。

俺げぇは、どげんなったっじゃろかい？ みんなはどっかに、家移いをしたっじゃろかい？

「あん、すんもはんどん。浦島ん家を知いもはんか？」

浦島さぁが一人の年な者に尋ねっみったや、年な者はちっと首ょかたびけっせぇ言もした。

「浦島？ ・・・ああ、間違なし浦島ちゅう人じゃれば、七百年ばっかい前、海に出ったない、帰っ来んかったっじゃいげなど」

「なんち!?」

年な者の話しょ聞っせぇ、

浦島さぁはひったまがった。

浦島太郎（標準語）

浦島さんの家は、どこにも見あたりませんし、出会う人も知らない人ばかりです。

わたしの家は、どうなったのだろう？ みんなはどこかへ、引っ越したのだろうか？

「あの、すみません。浦島の家を知りませんか？」

浦島さんが一人の老人にたずねてみると、老人は少し首をかしげて言いました。

「浦島？ ・・・ああ、たしか浦島という人なら、七百年ほど前に海へ出たきりで、帰らないそうですよ」

「えっ!?」

老人の話しを聞いて、

浦島さんはびっくり。

浦島太郎（えびのの方言）

竜宮ん三年は、この世ん七百年

に当たっとじゃろかい？

「家族も友だっも、みんな

け死んだちゅうこっな・・・」

がっくい肩を落とした浦島さぁは、ふと、持っちょっ

た玉手箱を見つめもした。

「そげんいえば、乙姫さぁが言うちょっいやったな

ぁ。こん玉手箱を開くっと、『時』が戻いもひどち。

・・・ひょっとすっと、こよ開くっと、自分が暮らしちょ

った頃い戻いかもしれん」

そげん思た浦島さぁは、開くっといかんち言われ

ちょった玉手箱を開けっしもやした。

モクモクモク・・・。

そしたや中から、まっ白か煙が出っきもした。

浦島太郎（標準語）

竜宮の三年は、この世の七百年

にあたるのでしょうか？

「家族も友だちも、みんな死んで

しまったのか・・・」

がっくりと肩を落とした浦島さんは、ふと、持ってい

た玉手箱を見つめました。

「そういえば、乙姫さまは言っていたな。この玉手箱を

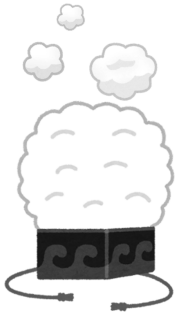
開けると、『時』がもどってしまうと。・・・もしかしてこ

れを開けると、自分が暮らしていた時に戻るのでは」

そう思った浦島さんは、開けては

いけないと言われていた玉手箱を

開けてしまいました。モクモクモク・・・。



すると中から、まっ白のけむりが出てきました。

浦島太郎（えびのの方言）

「おおっ、こやないな」

煙の中に、竜宮や美しか乙姫さぁの姿が映いもした。

そしたなら楽ひかった竜宮ん三年が、次から次、映ひ出されたげな。

「ああ、俺は、竜宮へ戻っきたっじゃろかい」

浦島さぁは喜っもした。

じゃっどん、玉手箱から出っきた煙は、だんだん薄なっせぇ、そけ残ったとは、髪の毛もひげもまっ白の、ヨボヨボの爺さんになった浦島さぁだけじゃひた。

おわい

浦島太郎（標準語）

「おおっ、これは」

けむりの中に、竜宮や美しい乙姫さまの姿がうつりました。

そして楽しかった竜宮での三年が、次から次へとうつし出されます。

「ああ、わたしは、竜宮へ戻ってきたんだ」

浦島さんは喜びました。

でも、玉手箱から出てきたけむりは次第に薄れていき、その場に残ったのは、髪の毛もひげもまっ白の、ヨボヨボのおじいさんになった浦島さんだけでした。

おしまい

金太郎（えびのの方言）

昔昔、あしがら山ん山奥に、金太郎ち言う名前ん男ん子がおいもした。

金太郎ん友だっは、山ん動物たっじゃひた。

金太郎は毎日毎日、動物たっと相撲を取っせぇ遊んじょいもした。

「はっけよい、のこった、のこった」

「金太郎きばれ、クマさぁ負くんな」

じゃっどん、勝っとはいっも金太郎で、ふとかごてんクマさぁじゃってん、金太郎にはかなわんかったげな。

金太郎（標準語）

むかしむかし、あしがら山の山奥に、金太郎という名前の男の子がいました。

金太郎のともだちは、山の動物たちです。

金太郎は毎日毎日、動物たちとすもうをして遊んでいました。

「はっけよい、のこった、のこった」

「金太郎がんばれ、クマさん負けけるな」

だけど、勝つのはいつも金太郎で、大きな体のクマさんでも、金太郎にはかないません。

金太郎（えびのの方言）

「こうさん、こうさん、金太郎は強かなぁ。じゃっどん、次負けんど」

今度はつな引っです。

山中ん動物たっが相手でん、金太郎一人にはかなわんかったげな。

「つな引っも金太郎の勝っ！」

じょじょな力持っの金太郎じゃったどん、強かだけじゃなかっせぇ、まこて優しか男ん子じゃひた。

ある日、クマん背中い乗っせぇ山道ょ行っおったや、谷ん所で動物たっが困っちょいもした。

「どげんすかい？ 橋がなかで、向こうせぇ渡いがならん」

金太郎（標準語）

「こうさん、こうさん、金太郎はつよいなあ。でも、次は負けないぞ」

今度はつな引きです。

山中の動物たちが相手でも、金太郎一人にかないません。

「つな引きも金太郎の勝ち！」

大変力持ちの金太郎ですが、強いだけでなく、とてもやさしい男の子です。

ある日、クマの背中に乗って山道を行くと、谷のところで動物たちがこまっていました。

「どうしよう？ 橋がないから、向こうへわたれないよ」

金太郎（えびのの方言）

「そいなら、俺にまかせやん」

金太郎は近き生えちょったふとか木にドーン！

ち突っ当たっ、木をつんぼったなら、一寸のこめ

一本橋ょ作ったげな。

そん後、強か力とやさしか心を持った金太郎

は、立派な若者にないもっせぇ、都んえらかお

侍さんの家来になっせぇ、悪者の次から次、やっ

つけたっじゃいげな。

おわい

※ 金太郎は、坂田金時と言う名で源頼光に仕え、酒呑童子と

よばれる鬼を退治したとされています。

金太郎（標準語）

「よし、ぼくにまかせておけ」

金太郎は近くに生えている大きな木にドーン！

と体当たりしてへし折ると、たちまち

一本橋を作ってしまいました。

その後、強い力とやさしい心を持った金太郎は、

立派な若者になり、都のえらいお侍さんの家来

になって、悪い者をつぎつぎにやっつけたということ

です。

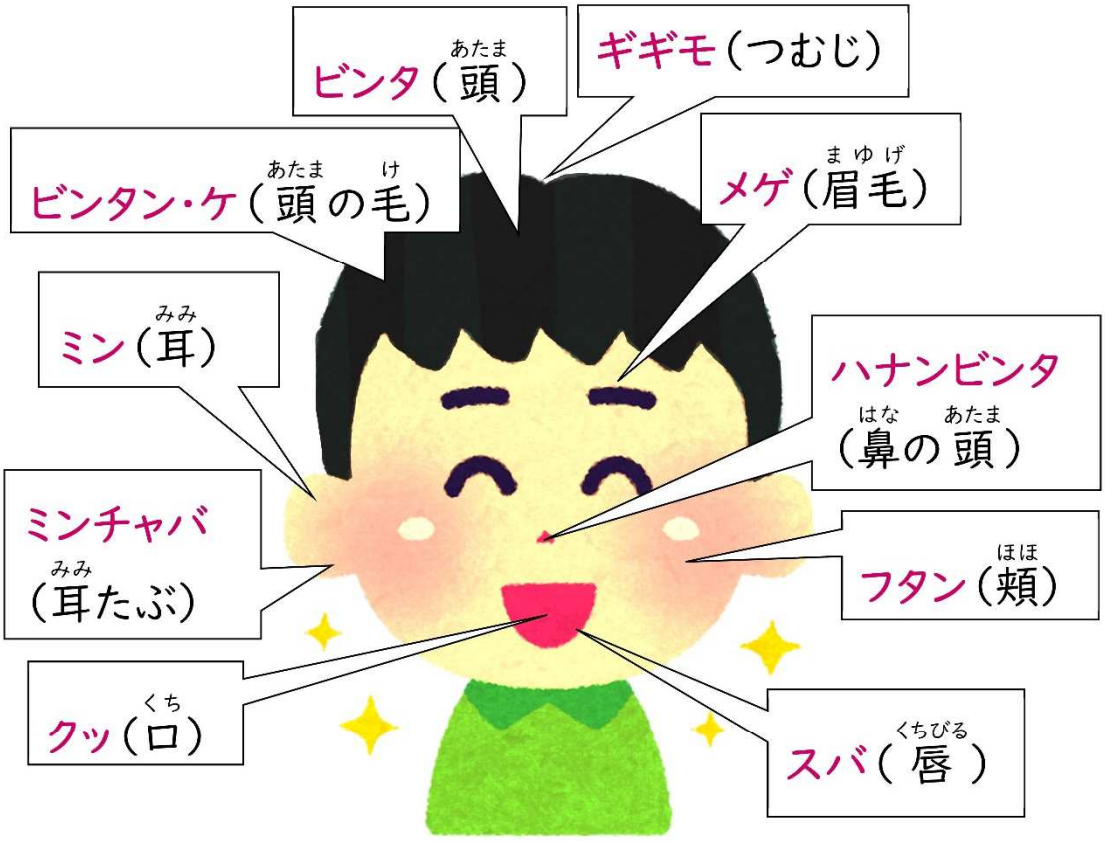
おしまい

※ 金太郎は、坂田金時と言う名で源頼光に仕え、酒呑童子と

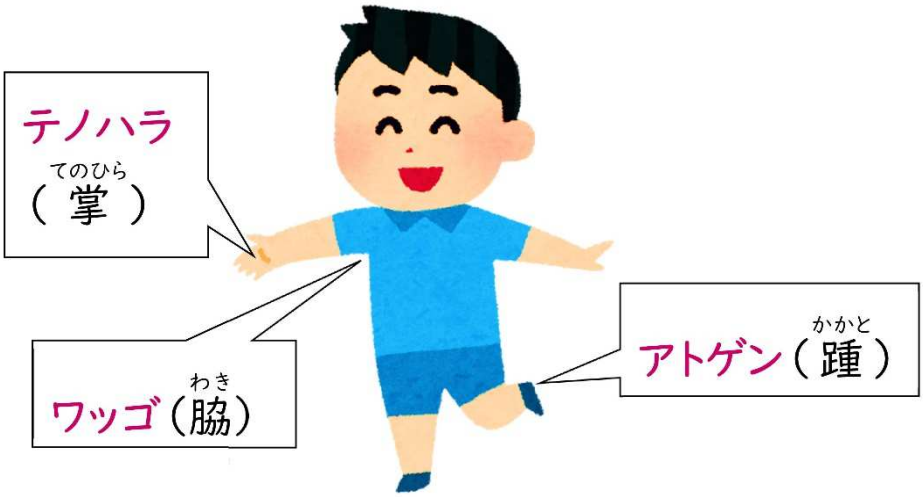
よばれる鬼を退治したとされています。

えびのの方言を使ってみよう！
ー Part 1 ー

頭と顔と体の名称：えびのの方言（標準語）



ゴテ（五体＝頭・首・胴・手・足で、体全体を表します）



えびのの方言を使ってみよう！
ーPart２ー

「ありがとう」の方言は「オオキニ」

「良い」の方言は「ヨカ」

「いらっしゃいませ」の方言は「オジャッタモンセ」

「美味しい」の方言は「ウンマカ」

「またね」の方言は「マタガンソ」

「まぁ、お茶でも一杯飲んでゆっくりしてください」の方言は「マ、チャイッペ」

（物事に取りかかる時、お茶を飲む時のようなゆっくりした気持ちになりましょうという意味があります。）

参考・引用文献

<図書>

資料名	発行年	著者・編者	出版社・発行所など
薩摩ことば（加久藤地区）	2016年5月	白坂安/著	鉱脈社
ある農村のサツマ弁　西小林の方言	2002年12月	入佐一俊/著	かわち印刷有限会社
都城さつま方言辞典	1992年5月	瀬戸山計佐儀/著	三州文化社

【標準語のお話の掲載元】福娘童話集＜みんなが知ってる日本の有名な話＞
桃太郎　：http://hukumusume.com/douwa/betu/jap/08/01.htm
浦島太郎：http://hukumusume.com/douwa/betu/jap/07/01.htm
金太郎　：http://hukumusume.com/douwa/betu/jap/06/01.htm

【編集協力】上谷川則男

発行/2025 年 3 月

し れ き しみんぞくしりょうかん
えびの市歴史民俗資料館

〒889－4311　宮崎県えびの市大字大明司 2146-2　TEL/FAX　0984-35-3144

ホームページ

X（旧 Twitter）